

蜻蛉卷における宮の君の出仕

山口一樹

はじめに

『源氏物語』の蜻蛉巻では浮舟失踪後の動静が語られているが、巻の後半に至ると物語の舞台は都に移る。ここでは式部卿宮の姫君が父を亡くして出仕し、宮の君と呼ばれるようになったことが語られている。

この春亡せたまひぬる式部卿宮の御むすめを、継母の北の方ことにあひ思はで、兄の馬頭にて人柄もことなることなき心かけたるを、いとほしうなども思ひたらで、さるべきさまになん契ると聞こしめすたよりありて、「いとほしう。父宮のいみじくかじづきたまひける女君を、いたづらなるやうにもてなさんこと」などのたまはせければ、「略」このころ迎へとらせたまひてけり。「略」限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひき懸けたまふぞ、いとあはれなりける。
(蜻蛉⑥二六三頁)

宮の君は継母の兄弟である馬頭との不相応な縁談を強いられたものの、事情を知った明石中宮に迎えられて女一宮に仕えることになったのであった。この出仕にはじまる宮の君の挿話について、先行研究では浮舟を物語の舞台に呼び戻す機能を果たしていることが論じられてきた。蜻蛉巻は前半部より浮舟の再登場を促していることが指摘されている^①、宮の君については藤井貞和氏が非在の浮舟を想起させる一因として言及したほか、吉井美弥子氏は宮の君と浮舟との重なりから物語が浮舟なしで新たな状況を切り開けずにいることを見て取り、野村倫子氏は女房になった宮の君との対比により浮舟の「女君性」が保証され薫の追慕の対象になると説いた^④。このように作品構成上の意義が論じられる一方、宮の君の出仕は物語成立期の出仕の実態を反映したものであるとも考えられてきた。藤原道長が娘の格上げを図り高貴な女房を召し集めた等の事情により、物語成立期には出自の高い女性の出仕が増加していた。それゆえ野村倫子氏は宮

の君の出仕について「現実社会を反映するもの」としており、高橋由記氏も道長政権確立後の出仕の実態が宮の君の設定を可能にしたとして「特定の一族にだけ権力が集中した時代様相を色濃く表している」と説く。^⑦ 両氏と共通する見解は近時の諸論に散見され、ほぼ通説になっていようである。

宮の君は式部卿宮の娘であるから、高貴な出自の人物が女房になる、という点において物語成立期の出仕の実態と接点を持つのは確かであろう。しかしそれだけの理解で十分といえるのだろうか。従来諸説では史実との関係に焦点があてられる一方、先行物語との関係についてはあまり論じられてこなかった。^⑧ とくに宮の君が出仕するに至った経緯に継母が関わっていることは看過すべきでないように思う。宮の君は継母によって馬頭と結婚させられそうになっているが、この点については池田和臣氏が『源氏物語』中の継子いじめ譚を瞥見するなかで既存の発想を踏まえたものであることに触れている。^⑩ とくに『落窪物語』において落窪の君は継母から典薬助との関係を強いられており、宮の君との共通性が確認できる。本稿で注目したいのは、落窪の君が女房としての扱いも受けており、『源氏物語』中にもそれに類する事例が見出せる点である。宮の君が継母から不当な縁談を強いられただけでなく、その境遇をきっかけに女房に身を落としているのも、既存の継子譚に着想を得たものと考えられるのではなからうか。

以上より、本稿では宮の君の出仕について落窪の君を中心に継子譚の女君と比較することで、特徴をとらえ直すことを目指す。宮の君の出仕が物語成立期の社会状況と接点を持つだけでなく、継子譚の発想の系譜に位置づけられるものでもあることを確認したうえで、男君が女君を女房の立場から救い出さない、という類型から逸脱した新たな展開を辿ることで手習巻以後の物語が導き出されていることをみていきたい。

(一) 女房扱いを受ける女君

まず落窪の君が継母から女房としての扱いを受けていたことを確認したい。

一 箏の琴を世にをかしく弾きたまひければ、当腹の三郎君、十ばかりなるに、琴心にいれたりとて、「これに習はせ」

と北の方のたまへば、時々教ふ。

(卷之一、一八一―九頁)

二 二人の婿の装束、いささかなるひまなく、かきあひ縫はせたまへば、しばしこそ物いそがしかりしか、夜も寝も寝ず縫はず。

(卷之一、一九頁)

本文一において、継母は落窪の君に命じて三郎君に琴を教えさせている。このち落窪の君の手紙を継母が得て道頼との関係を知った際には、落窪の君が男に迎え取られるのを危惧して「よき吾子たちの使ひ人と見置きたりつるものを」(卷之一、七九頁)と思つている。落窪の君が三郎君に琴を教えているのは、この「よき吾子たちの使ひ人」としての役割に含まれるものであつたと考えられる。また本文二において、継母は大君と中の君の婿に贈る装束を落窪の君に寝る間もなく縫わせている。落窪の君が道頼と逢つたことで裁縫の進行が遅れた際、継母は女房である少納言に手伝わせており(卷之一、八七頁)、落窪の君が道頼に迎え取られた後には落窪の君に代わる女房を召し集めてもいる(卷之二、一四七頁)。婿の装束を縫うのは本来女房の役目であつたと考えられ、それを継母は落窪の君に押し付けていたのだと理解できる。なおあこぎが落窪の君に道頼を頼るよう諭す場面でも継母について「使ひたてまつりたまはむの心のいと深くて」(卷之一、四六頁)と述べており、あこぎの認識に即しても継母が落窪の君を女房として使役していたことが確かめられる。

落窪の君は「わかうどほり腹」(卷之一、一七頁)であり、皇室の血統をひく女君である。しかし実母を亡くしたことで継母から虐待を受けており、女房が担うべき仕事を強いられるのであつた。後ろ盾を失つて継母から虐待を受けるなか、皇統でありながら女房の立場に身を落とす、という推移を辿っている点には宮の君との共通性が見出せる。

ただし宮の君の場合は、父宮の死後、継母から不相应な縁談を強いられるところを明石中宮に迎えられて女一宮の女房になつたのであつた。継母の虐待が間接的に女房に身を落とすことにつながっている点は、継母から直接使役されてる落窪の君と相違する。そこから宮の君の出仕を先行物語の発想とは切り離して捉える立場もあろうか。

しかし『源氏物語』中の継子譚の枠組みを持つ物語は、既存の発想を踏襲しながらも変化させて織りなされていた点

に留意したい。⁽¹⁾ こうした傾向は皇統の女君が女房扱いを受ける危機にさらされる事態についても見て取れる場合がある。まず兵部卿宮の娘である紫の上の場合は、姫君の失踪を知った継母の心情が「わが心にまかせつべう思しける」(若紫①二六〇頁)と語られており、陣野英則氏によって継母が紫の上を女房として使役しようとしていたことが読み取られている。⁽²⁾ 継母に使役される可能性が示されることで、光源氏が紫の上を連れ去ることに救済としての意味が付与され、合理化されているのだと考えられる。一方、常陸宮の娘である末摘花に対し、叔母が「この君をわがむすめどもの使ひ人になしてしがな」(蓬生②三三三頁)と娘の女房にしようとしているのも、畑恵理子氏によって『落窪物語』の継母の造型を継ぐものであることが指摘されているが、この場合は継母の役どころを継母でない人物が担う体であるといえる。受領の妻になった末摘花の叔母は、姉妹である末摘花の母に侮辱されていたとして(蓬生②三三三頁)、姫の末摘花に恨みを転化している。継子譚に由来する虐遇の形を踏襲しながらも、継母ではなく叔母であるという設定によってその必然性を生じさせ、受領層ゆえの自意識をも掘り下げているといえる。継子譚の枠組みを持つ物語において、女房として扱われる事態は皇統の女君が陥る逆境の一つの典型であったと考えられるが、『源氏物語』ではときにそれが状況に変化を加えた形であられるのである。⁽³⁾

以上のような事例を思い返せば、宮の君が継母の虐遇をきっかけに女房に身を落としているのも、先行する継子譚に着想を得ながら変化を加えた形であると考えられるのではなからうか。女君の身边に継母が存在しながら、その人物から直接使役されるのでない事例は先に見いだせないのであるが、ここでは継母の虐遇と皇統の女君が女房に身を落とす事態とが連なっている点を重視して、宮の君の出仕は継子譚を変奏させていく物語が蜻蛉巻に至って新たに編み出した女君の零落の形であったと考えたい。そしてそのように先行する物語との関係を視野に入れると、宮の君の出仕について高貴な女性の出仕が増加した現実を取り入れたものとする従来の理解は、やや物語成立期の史実に力点を置きすぎた見方であったといえるのではなからうか。むしろ高貴な女性が女房に身を落とす事態は現実が増加する以前から物語の世界では描かれていたといえ、⁽⁴⁾ 宮の君の場合はその発想の系譜に連なることが現実の社会状況と接点を持つことにもつながったのだと考えられる。

(二) 宮の君の待遇と薫の失望

次に宮の君の特徴について、出仕後の待遇に注目して検討を進めたい。紫の上や末摘花の場合は女房として扱われる事態が未然に回避されてしまうため、ここでも落窪の君との比較を中心に行う。以下、継母から直接女房扱いを受ける落窪の君の場合と異なり、宮の君は異例の高待遇で女一宮方に迎えられていることに注目したい。そうした出仕後のあり方は宮の君が他の女房とは別格の存在であることを印象付け、既存の継子譚とは異なる物語展開を導き出しているのではなからうか。宮の君の呼称や装束、居所のあり方に焦点をあてて検討する。

一 限りあれば、宮の君などうち言ひて、裳ばかりひき懸けたまふぞ、いとあはれなりける。

(蜻蛉⑥二六三頁)

二 宮の君は、この西の対にぞ御方したりける。若き人々のけはひあまたして、月めであへり。

(蜻蛉⑥二七三頁)

本文一は、はじめに引用した宮の君が出仕した直後の箇所を一部再掲したものである。「限りあれば」とあるため「宮の君」という呼称は女房としての呼び名であると解釈できるが、高橋由記氏が論中で取り上げた脩子内親王付き章明親王女も「一品宮々君」と呼ばれていることから、⁽¹⁶⁾宮家の姫君であることに由来する呼称でもあったと考えられる。またそうした名で呼ぶことについても、宮の君の場合は「うち言ひて」とあり周囲から氣遣われていたことが表れている。⁽¹⁷⁾これに対し落窪の君の場合は継母が邸の者たちに「落窪の君と言へ」（巻之一、一七頁）と命じたことから、居住する「落窪」に由来する蔑称で呼ばれており、宮の君のような血統への配慮は何えない。

また宮の君は「裳ばかりひき懸けたまふぞ」とあるように、裳を着用する一方、唐衣の着用は免除されている。この点は『新潮日本古典集成』が「主人の前では女房は裳、唐衣着用の正装が決りである」とするように、式部卿宮の姫君であることによる特別措置であったと考えられる。落窪の君の装束については父の中納言が「白き袷一つをこそ着てゐたりつれ」と言及しており（巻之一、二六頁）、袷の袷一枚の着用しか許されていないことが女君の過酷な状況を象徴

していた。

本文二は薫が宮の君のもとを訪れる場面であるが、宮の君は対の屋を居所としているほか多数の女房を付き従えていることも確認できる。『栄花物語』で関白藤原道兼の娘が藤原威子のもとに出仕した際も「大人十人、童女二人、下仕」(あさみどり②一四三頁)が付き添っていたと語られており、高貴な女性が女房になるとき、その女性に仕える女房が同行する場合もあったことが想定される。宮の君が出仕する際も多数の女房が同行しており、そうするのに十分な住まいが与えられたのだと考えられる。一方の落窪の君は「落窪」に住まわせられているほか、典薬助との関係を強いられるときは「柩戸の廂二間ある部屋の酢、酒、魚など、まさなくしたる部屋」(巻之一、一〇三頁)と悪臭ただよう部屋に幽閉されていた。

落窪の君に対する継母の態度は「つかうまつる御達の数にだに思さず」(巻之一、一七頁)とも語られている。呼称や装束、居所のあり方に即して確認されるように、落窪の君は並の女房以下の劣悪な環境を強いられていたのであった。それに対し、宮の君は式部卿宮鍾愛の姫君という高い出自に配慮した待遇で迎えられている。このような両者の相違は、継母から直接女房扱いを受けているか否か、という点に基づくものといえる。宮の君の場合は継母の虐待からの救済措置として出仕が選び取られたのであり、それゆえこうした高待遇も実現したのであった。

『落窪物語』において落窪の君が並の女房以下の過酷な状況に置かれていることは、男君によって救い出される展開を促すものと思しい。道頼はとくに「落窪の君」と呼ばれていることから女君が継母や父親から冷遇されているのを確かめ、「いかで、よくてみせてしがな」(巻之一、八七頁)と姫君を幸福にし、継母方に復讐を果たすことを決意するのである。また女君を女房扱いから救い出すのに類する行為は光源氏にもしばしばみられ、物語展開や主人公像の類型になつていたと考えられる。先述のとおり、光源氏は紫の上を連れ去ったことで継母に女房として扱われる危機から意図せずとも救い出しており、叔母の筑紫行きの勧誘を末摘花が拒んだ後も女君を邸に迎え入れ生活を援助している。このほか玉鬘を迎える際も、男たちの興味を集める存在にしようとするねらいと表裏するが、秋好中宮の女房として認識されないよう配慮して居所を選んでいた(玉鬘③一二五頁)。

一方、宮の君の場合はその出自にふさわしい待遇を受けているため、落窪の君の場合と比べれば女房の立場が持つ遊境としての意味合いは弱いといえる。¹⁵⁾むしろその待遇のあり方は、宮の君が並の女房とは一線を画す存在であることを印象付けていると考えられる。¹⁶⁾女一宮方の女房は「やむごとなき人の御むすめなどいとも多かり」（総角⑤三〇五頁）と出自の高い者ばかりであることが語られていたが、それらとも別格の存在であることを示しているよう。そしてそうした宮の君の出仕のあり方は、男君が女君を救い出さない、という既存の型から外れた独自の展開を導いているのではないだろうか。宮の君の格の高さが印象付けられるなかで、薫は宮の君に宮家の姫君としてふさわしい振舞いを期待し、それゆえ失望するのである。薫が宮の君に対面した場面を引用する。

人づつともなく言ひなしたまへる声、いと若やかに愛敬づき、やさしきところ添ひたり。ただ、なべてのかかる住み処の人と思はば、いとをかしかるべきを、ただ今は、いかで、かばかりも、人に声聞かすべきものとならひたまひけんとなまうしろめたし〔略〕これこそは、限りなき人のかしづき生ほしたたまへる姫君、また、かばかりぞ多くはあるべき、あやしかりけることは、さる聖の御あたりに、山のふところより出で来たる人々の、かたほなるはなかりけるこそ、この、はかなしや、軽々しやなど思ひなす人も、かやうのうち見る気色は、いみじうこそをかしかりしか

（蜻蛉⑥二七四―五頁）

自ら求めたにも拘わらず、宮の君が声を聞かせたとき薫は宮の君に失望する。先立つ場面で小宰相の君が声を聞かせて話した際は「見し人よりも、これは心にくき気添ひてもあるかな」（蜻蛉⑥二四六頁）と、浮舟より嗜み深い者と好意的に受け取っていた。宮の君に対して薫が失望したのは「なべてのかかる住み処の人と思はば、いとをかしかるべきを」ともあるように、女房としてではなく、宮家の姫君としてふさわしい振舞いを期待していたためと理解できる。そうした宮の君に対する薫の期待は、宮の君が他の女房とは別格の存在であることが印象づけられていたことで、必然のものとして導かれていると考えられる。宮の君に失望してしまう薫の姿は、女君を女房の立場から救い出す男君など物語の理想に過ぎなかったことを照らし返すようでもある。薫は宮の君とは対照的に大君や中の君が鄙の地で出家者に育

てられていながら魅力的であつたことを想起し、次いで浮舟の可憐さについても思い返している。

以上のように宮の君が継母の虐待をきつかけに女房の立場に身を落とし、しかし手厚い待遇で迎えられていることはその格の高さを印象づけ、男君が女君に失望し見放すという既存の型から逸脱した新たな展開を導いていたのである。

(三) 宮の君の物語の意義

宮の君の物語は型から外れた展開を辿ることで何を描き出し、宇治十帖の構成上いかなる機能を果たしたのか。宮の君に失望した薫の心情に検討を加えることで考察を深めたい。ここでは宮の君登場以前にも、薫が宇治の女君との関係を喪失したとき、女房の立場にある女性たちとの関係が繰り返し語られていたことに注目する⁽²⁾。都を舞台とするこれらの場面では、女房との関係が組上に載せられることで、宇治の女君が薫にとつていかなる存在であつたかが表されている。とくに宿木巻の按察の君との関連は従来論じられてこなかったが、こうした一連の叙述との脈絡を検討する必要があるのではなからうか。宮の君に失望した際の薫の心情については、宇治の女君たちへの執着がより強固なものになっていることともに、浮舟を大君の代替として捉える認識も持続していることをみていきたい。

以下本文一は大君死後、按察の君との関係が語られる場面、本文二は浮舟失踪後、小宰相の君との関係が語られる場面である。

一 例の、寝ざめがちなるつれづれなれば、按察の君とて、人よりはすこし思ひましたまへるが局におはして、その夜は明かしたまひつ。
(宿木⑤四一八頁)

二 見し人よりも、これは心にくき気添ひてもあるかな、などでかく出で立ちけん、さるものにて、我も置いたらましのものを、と思す。人知れぬ筋はかけても見せたまはず。

(蜻蛉⑥二四六―七頁)

まずこれらの女房たちに対する薫の関わり方に注目したい。大君を亡くしたのち薫は按察の君と一夜を共にしており、

その心情は「寝ざめがちなるつれづれなれば」と語られていることから、大君を亡くした喪失感を慰めるためであったことが伺える。また小宰相の君と対面した際は「さるものにて、我も置いたらましものを」とあり、実際に行動に移るわけではないものの、邸に迎えとつてよいほどの相手だと好感を抱いている。これらに対し宮の君の場合は、女房の立場への転落に同情してはいたが（蜻蛉⑥二六四頁）、対面後即座に失望し、宇治の女君たちを想起するばかりであった。

すなわち薫は宇治の女君との関係を喪失するたび、都の女房たちと交渉を重ねて実事に至るなり魅力を感じるなりしてきたのだが、宮の君に対しては何の進展も見られないうちに関係を断念しているのである。とくに按察の君を大君の喪失感を慰める相手としていたのに注目すれば、宮の君との関係を早々に断念したことには、薫の想いが宇治の女君以外に転化し得なくなつたことが表れていると考えられる。按察の君との逢瀬のち薫が中の君に「紛るることもやあらんなど思ひよるをりをりはべれど、さらに外ざまにはなびくべくもはべらざりけり」（宿木④四四七頁）と述べていたように、薫にとつて宇治の女君が唯一無二の存在であることは宿木巻の段階ですでに表れていたのだが、この事實は宮の君との関係を通してより揺るぎないものとして確かめられているといえる。宮の君は八の宮の兄弟を父に持ち、宇治の女君たちと血縁上連なる存在であるから、按察の君の場合とは異なり、交流を深めるなかで薫の喪失感が慰められる可能性も想定し得るように思われる。しかしそうはならずむしろ即座に関係が絶たれることで、大君や中の君、浮舟に対する執着の強さが証されるのである。八の宮の娘でない女性が新たに現れても薫との仲は進展し得ないことが確認され、それでもなお物語が書き続けられようとするとき、浮舟の再登場が要請されるのだと考えられる。

次に女房たちとの関係を経て薫が抱く宇治の女君たちへの想いに注目したい。先述のとおり、薫は按察の君と逢瀬を交わした後、大君について何者にも代えがたい存在であったとしている。これに対し小宰相の君と対面した際には「見し人よりも、これは心にくき気添ひてもあるかな」と、小宰相の君を浮舟より嗜みがあると評している。この評価について、すでに原陽子氏は薫にとつて浮舟が大君の形代に過ぎない存在であったことが表れていると指摘しているが、こうした薫にとつての浮舟の存在の軽さは、按察の君と大君を思い比べたときとの落差に注目することで、より明確にみてとることができる。

このち宮の君と対面した際には「かやうのうち見る気色は、いみじうこそをかしかりしか」と、浮舟の魅力を捉え直しているようではある。しかしここでも浮舟を大君の代替と捉える意識は通底していると考えるべきであろう。⁽²⁾それは浮舟に対する評価が「さる聖の御あたりに、山のふところより出で来たる人々の、かたほなるはなかりけるこそ、この、はかなしや、軽々しやなど思ひなす人も」と、大君や中の君の存在を想起するなかで導かれているためである。こうした薫の心情の推移は女一宮との恋を断念した後にもみられる。薫は「昔の人ものしたまはましかば、いかにもいかにも外ざまに心を分けましや(略)また宮の上にとりかかりて、恋しうもつらくも、わりなきことぞ、をがましまで悔しき」(蜻蛉⑥二六〇頁)と大君や中の君との過去を回想したうえで、「これに思ひわびてさしつぎには、あさましくて亡せにし人の〔略〕ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を」(蜻蛉⑥二六〇―一頁)と浮舟の魅力を思い返していた。すなわち蜻蛉巻後半部において、薫は大君や中の君に連なる存在として意識したときのみ浮舟の魅力を見出しているのである。この点には薫が未だ一個人として浮舟と向き合っていないことが表れている。

こうしてみると宮の君に失望した際の薫の心情には、宇治の女君に対する執着の強さとともに、浮舟に対する認識の皮相さが同時に表れていると考えられる。薫の浮舟に対する扱いの軽さや入水に至った苦悩を理解できていないことは蜻蛉巻の随所で示唆されているが、宮の君との関係によって導かれた薫の心情にもそうした一面が見て取れるのである。手習巻以後の物語では浮舟が生存していたことが明らかになるが、いまだ浮舟の抱えていた苦悩に思い至らない薫の姿も捉えられている。薫は明石中宮に対し浮舟の性格について「心とおどろおどろしうもて離るることははべらずやと思ひわたりはべる人のありさま」(夢浮橋⑥三九五頁)と述べ、小野に小君を遣わしたのち返書がないときは「人の隠し多たるにやあらん」(夢浮橋⑥三九五頁)と邪推する。こうした浮舟に対する認識の甘さは、宮の君の物語でも予示されていたといえる。はじめに述べたとおり、先行研究では宮の君の物語について浮舟を再登場させる意義が論じられてきたが、薫が浮舟と再会するとき女君の心の深層に思い至ることはできるのか、といった問題が同時に投げかけられていることにも留意すべきではなからうか。

以上、宮の君の出仕は、皇統の女君が女房扱いを受ける継子譚の発想を変化させながら引き継ぎ、男君が女君に失望するという新たな展開を導いていたのであるが、それによって宇治の女君たちへの薫の執着の強さと浮舟に対する皮相な認識が浮き彫りにされ、浮舟を物語の舞台に呼び戻すとともに、薫との関係が孕む問題をも示唆していくのであった。

※『源氏物語』『落窪物語』『栄花物語』の引用は『新編日本古典文学全集』に拠る。

(注)

- 1 菊田茂男氏「東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋」(山岸徳平・岡一男監修『源氏物語講座 第四卷 各巻と人物Ⅱ』有精堂、一九七一年)、小林正明氏「宇治十帖の招魂」(『むらさき』第二十一輯、紫式部学会、一九八四年七月)、安藤徹氏「隠すことと顕わすこと」(『源氏物語と物語社会』森話社、二〇〇六年、初出一九九四年)等
- 2 藤井貞和氏「王権・救済・沈黙」(『デイヴィニタス叢書 三 源氏物語の始原と現在』砂子屋書房、一九九〇年、初出一九七二年)
- 3 吉井美弥子氏「蜻蛉巻試論——浮舟の「四十九日」」(『読む源氏物語 読まれる源氏物語』森話社、二〇〇八年、初出一九八九年)。宮の君と浮舟、あるいは女一宮との重なりについては宗雪修三氏「世づかぬ」薫——蜻蛉の巻の独詠歌と主題」(『物語研究会編『物語研究——特集・語りそして引用』新時代社、一九八六年)、原陽子氏「女一の宮物語のゆくえ」(今井卓爾・鬼塚隆昭・後藤祥子・中野幸一編『源氏物語講座 第四巻 京と宇治の物語 物語作家の世界』勉誠社、一九九二年)、池田和臣氏「浮舟物語の方法——二つの挿話をめぐって——」(『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書院、二〇〇一年、初出一九九七年)にも言及があり、宮の君の存在は大君の魅力を想起させるとする三角洋一氏「蜻蛉巻の宮の君」(『むらさき』第四十八輯、紫式部学会、二〇一一年二月)もある。

4 野村倫子氏「『蜻蛉』の宮の君——薫の浮舟評を対女房意識よりみる——」(『源氏物語』宇治十帖の継承と展開 女君流離の物

- 語』和泉書院、二〇一一年、初出一九九九年・二〇〇六年)
- 5 阿部秋生氏「作者の環境」(『源氏物語研究序説』東京大学出版会、一九八四年)、吉川真司氏「平安時代における女房の存在形態」(『律令官僚制の研究』塙書房、一九九八年、初出一九九五年)
- 6 注4野村倫子氏
- 7 高橋由記氏「『源氏物語』「蜻蛉」巻の宮の君」(『平安文学の人物と史的世界——随筆・私家集・物語——』武蔵野書院、二〇一九年、初出二〇〇一年)
- 8 宮の君の出仕について久下裕利氏は「現実に取り得る事例の反映であった可能性」があるとし(『宇治十帖の表現位相——作者の時代との交差——』『源氏物語の記憶——時代との交差』武蔵野書院、二〇一七年、初出二〇一〇年)、廣田収氏は「歴史の現実による物語への「浸食」とする(『式部卿宮の姫君の出仕』横井孝・久下裕利編『宇治十帖の新世界』武蔵野書院、二〇一八年)。
- 9 千野裕子氏は『うつほ物語』中の高貴な女房たちについて論じるなかで宮の君との相違に言及している(『うつほ物語』の女房たち)『女房たちの王朝物語論』『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』青土社、二〇一七年、初出二〇一三年)。本論では宮の君の出仕経緯に継母が関わっていることを重視し継子譚との関係を分析する。
- 10 池田和臣氏「『源氏物語』における継子譚の形態分析——玉鬘物語の解析のために——」(『源氏物語 表現構造と水脈』武蔵野書院、二〇〇一年、初出一九九七年)。上坂信男氏も継母が宮の君に「ことにあひ思はで」と冷淡であることについて既存の継母像を踏まえたものと言及する(『源氏物語の思惟とその超克——継母子物語のばあい——』『平安文学研究』第五十四卷、平安文学研究会、一九七五年)。
- 11 注10池田和臣氏や上坂信男氏の論考のほか石川徹氏「継子ものとその周辺——落窪物語をめぐる——」(『平安時代物語文学論』笠間書院、一九七九年、初出一九六七年)、日向一雅氏「源氏物語と継子譚」(『源氏物語の主題「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社、一九八三年)、高木和子氏「『源氏物語』における継子譚の位相」(『源氏物語の思考』風間書房、二〇〇二年、初出二〇〇一年)など参照。

- 12 陣野英則氏「主人格の女性と女房たちとの間」〔源氏物語論 女房・書かれた言葉・引用〕勉誠出版、二〇一六年、初出二〇〇五年
- 13 畑恵里子氏「蓬生」巻の末摘花と『落窪物語』——「わがむすめどもの使ひ人」考——〔王朝継子物語と力——落窪物語からの視座——〕新典社、二〇一〇年、初出二〇〇八年。なお畑氏は「叔母」とは「母」へと繋がり、「継母」とも連鎖する多義的な存在」と末摘花の叔母を継母に連なる存在としているが、ここでは本文のうえで「叔母」（蓬生②三三三頁）とされていることに力点を置き、あくまでも継母ではない存在として理解したい。
- 14 このほか継子譚の枠組みを持つことが指摘されている浮舟の物語でも女君が匂宮から女房としての扱いを受けており（浮舟⑥一五五頁）、継母ではなく男君によって使役される点の特徴であると思われる。
- 15 本稿では継子譚との関係に焦点をあてたが、注9千野氏に指摘されるとおり『うつほ物語』にも高貴な出自の女房は複数登場している。
- 16 注7高橋由記氏。資料の引用は『天祚禮祀職掌録』（塙保己一編『群書類従 第三輯 帝王部』訂正三版、統群書類従完成会、一九五九年）に拠る。
- 17 『源氏物語大成』によれば別本の陽明家本と保坂本では「うち言ひて」を「いひて」とするが、ほかに目立った写本間の異同はみられない。
- 18 この点は女房に身を落としたことについて、宮の君の葛藤や苦悩が掘り下げられないことから確かめられる。先の本文一で語り手が「あはれ」と評していることから、宮の君の出仕が零落の意味を持つことは見て取れるが、女君の内面には焦点があてられておらず、以後もその胸中が語られる場面は見出せない。一方、落窪の君の場合は継母から酷使されるなかで「いかでなほ消えうせぬるわざもがな」（巻之一、一九頁）等と絶望した心中が語られており、男君による救済が必然化されていると考えられる。
- 19 先の本文二で宮の君の居所は「御方」と語られていたが、同じ女一宮付き女房の小宰相の君の場合は「局」（蜻蛉⑥二四六頁）と語られ、主人である女一宮の居所が「御方」と語られている（蜻蛉⑥二四五頁）。こうした語られ方に即せば、宮の君は他の女房と一線を画すとともに主人格の一面すら持つ者として位置づけられていると考えられる。なお『源氏物語大成』によればこれら

の表現に写本間の異同はみられない。

- 20 夙に三田村雅子氏は『源氏物語』において女主人公の死後、その形代として召人が登場することを指摘している（『源氏物語における〈形代〉』（『源氏物語 感覚の論理』有精堂出版、一九九六年、初出一九七〇年）

21 注3原陽子氏

- 22 すでに注8廣田収氏は薫が宮の君と女一宮を「同じ人」と捉えている点に注目して「薫は、「ゆかり」とみる人物は同じだという人間の類同の認識に囚われている」と論じている。本稿の論旨も廣田氏の理解に重なる面はあるが、着眼点が異なり、浮舟に対する薫の認識に焦点をあてている。

- 23 秋山虔「薫大将の人間像」（『源氏物語の世界』東京大学出版会、一九六四年、初出一九五七年）、藤本勝義氏「浮舟失踪の波紋」（秋山虔・木村正中・清水好子編『講座 源氏物語の世界 第九集』有斐閣、一九八四年）等

〔付記〕 本稿は日本文学協会第三十八回研究発表大会（於金沢大学）における口頭発表の内容に加筆修正を加えたものである。席上および発表後に、教示を賜った先生方に心より御礼申し上げます。